

私の家は日当たりが非常に悪く、カーテンを開けていても光が差し込まずに一日中部屋の照明を点けていなければいけない。日当たりが悪いとは言え、外の明るさで過ごせなくはないのだが、どうしても気分が上がらない。真つ暗な部屋にいるのと薄暗い部屋にいるのでは微妙に後者の方が心が沈む気がした。…とまあこれは最もらしい言い訳で、本当の理由は他にあるのだけれど。

私は花が好きだ。理由は美しいから以外に無い。花のことに詳しいわけでも無いし、育てるのが好きなわけでもない。ただ、その美しく色鮮やかな姿にうっとりする時間が好きだった。私には無いその美しさが好きだった。

私はここ数年まともに人と喋っていない。出掛けるのも、生きていくための最低限の外出のみでほとんどを家の中で過ごした。それでも昔に比べれば十分に生きている心地がしていたし、今の方が幸せだった。

チャイムが鳴った。

「はい。」

「宅急便です。」

扉を開けると大きな花束を抱えた配達員が立っていた。早口でサインをするよう促され、やや強引に花束を押し付けられると身軽そうな体はあつという間に階段を下りて行った。

送り主には「恋人」とだけ書かれてあった。だが、私に恋人はいない。住所も電話番号も無く、相手が誰なのかは特定できなかった。気味が悪いと思うながらも今抱えているこの花束は息を飲むように美しかった。

誰からの贈り物だかわからない花束はもしかしたら配送ミスだったのかもしれないとも思ったが、私の名前も住所もしつかりとした筆跡で正しく記されており、ますます気味が悪かった。よくわからなかったが、とりあえず水を少量入れた花瓶に花を飾った。

数日後、その花はすぐに枯れてしまった。

花束が贈られてきてから一か月が経った。特に誰からも連絡は来なかったから、私の中では不思議な出来事のままほとんど忘れかけていた。

チャイムが鳴った。

「はい。」

「宅急便です。」

扉を開けると一か月前と同じお兄さんがまた大きな花束を抱えて立っていた。私は「あ」と声を漏らして驚いてしまったが、そんなことを気にも留めず、相変わらず忙しなくサインを要求する

と足早に去っていった。

「送り主はやはり「恋人」。誰なのだろう。気味が悪いが、正直そんなのはどうでもよくなっていった。私が今抱えている花束は先月のものより大きく、色鮮やかな姿をこちらに向けていた。見ず知らずの者から大好きな花束が毎月届くなんてこんな夢の様な話があるだろうか。」

花束をリビングへ運ぶ途中、紙切れが床に落ちた。拾い上げると、そこには「枯れてしまうよ」と書かれてあった。

私の家には鏡が無い。賃貸のアパートに住んでいるが、備え付けの鏡は取り外した。又は、大きな布で隠した。理由は簡単。自分の醜い顔が大嫌いだったからだ。そのせいで理不尽な事を言われたり、散々ひどい仕打ちも受けてきた。その鮮烈な記憶から、窓ガラスに映る自分の顔を見ただけで震えが止まらなくなり、気絶してしまったことがあった。それからは、なるべく自分の顔が見えない様に生活をしようかと心に決めた。

自分の顔は自分では見えない。鏡や窓ガラスが無ければ私は私の顔を見ることなく生活をする事が出来たし、人と会わないようにしていれば平気だった。そして、美しい花を部屋に飾り、眺めていられれば幸せだった。

数日後、大きな花束はあっさりと枯れてしまった。

私は花が少し羨ましかった。生きている間、こんなにも美しく咲き誇って、慈しまれてその一生を終える。人間と花とでは比べようもないのだが、やはり花が羨ましかった。そこで、自分の人生を思った。美しく咲き誇った時期はあっただろうか。まだ芽すら出ていないのではないか。このまま死んでゆくのだろうか。

それと、もうひとつ。私の心には引っかかる事柄があった。花は枯れてしまうものだが、私は自らの手で花の命を短くしてしまっていることだった。

本当は、日当たりの良さでこのアパートに決めた。大好きな花が美しく、少しでも長く咲いていられる様に、私の心が二度と塞ぎこまない様に、と決めたこの部屋はカーテンを開けると眩しいくらいの光が差し込む。

「枯れてしまうよ」

そうだ。カーテンを開けなければ。

数年振りに開けたカーテンの向こう側、私の目が捕らえたのは隣のアパートの住人。ベッドを囲む家族と思われる数人が涙を流し、眠っているお爺さんの手を握っていた。不謹慎にもその光景があまりにも美しく、私は思わず涙を流した。窓ガラスに映る自分の顔なんて気にも留めずに。